

「自分なりの葬式をしたい」「墓はつくらない」「葬儀や埋葬の方法を、自分で考えたい」と向き合い始めた。選びたいという人が増えている。地域や寺、葬儀社などに任せ従うものだった「弔いのかたち」は、どう変ぼうしてゆくのだろうか。

「わたしのときは無宗教で。お墓より、樹木葬にしたいんですが」

大転換

第11部 権利が変わる ②

……。コブしずおか

(静岡市)が毎週、開いている「お葬式の学習会」。担当者が最近の葬儀の傾向を説明し終えると、参加した会員の女性50が切り出した。

「元気で働き、すでに嫁いだ娘と、息子もいる。これまで葬儀の準備など思いもよらなかったが、今年、夫がが

い「からだ。同コブの葬祭事業担当、伊藤泉さんは「少前まで、こういう学習会は『縁起でもない』とタブーだった。今は毎回、盛況で質問や意見がどんどん出るんです。参加者は50〜60代が中心。夫婦連れも

弔いのかたち決める

納得して死にたい

珍しくない。こうした企画は、各地の自治体や葬儀社などが開き、定員を超え抽選になるケースも。一方、葬儀や埋葬方法などの希望も書き込める「エンディングノート」が広がり、書店に並ぶ。

生前予約も6割強

散骨や樹木葬への関心も高い。ある宗教法人が2006年、伊豆大島で樹木葬の専用墓

葬儀セミナー 毎回盛況

地(288区画)を設けたところ、すでに約8割が契約済みで、うち6割強は生前予約だという。

「世間体から型通りの葬儀や墓をつくるより、自分が納得できる方法を選びたいという思いを、ひしひしと感じる。死が個人化してきたんです。葬祭事情に詳しい、日本葬祭アカデミー教務研究室の二村祐輔代表はそう分析。少子化や厳しい家計も、寺や葬祭業者への「お任せ」を許さなくなっている」とみ

「特別こだわりのある葬儀をしたいわけではなく、地域への疑問の習慣もそれなりに大切にしたい」とは思う。「ただ心がこもった方法を模索しながら、来るべき時を迎えたい。死は自分のものですから」



トウ製のひつきなどユニークな葬儀用品が並んだ展示会。「自分なりの葬式」にこだわる人が増えている。東京都町田市

人としての生き方を重視し、無駄なことはしたくないという意識が強い。家族とく親しい人だけで行う「家族葬」の相談を受け付ける、都内の特定非営利活動法人(NPO法人)は説明する。

定年退職後、故郷の山梨県南アルプス市に戻った矢崎和仁さん(66)も家族葬を考える一人。91歳になる母親は10年以上前から、地元グループホームで暮らし、近隣とのつながりは薄れつつある。

そつした傾向の二因となつているのが、葬儀や供養にまつわる金

9件と、過去最多となつた。「説明を十分せず

団塊世代を中心に、葬祭市場で物を言い始めたことも大きい。「個

から